

# 大滝ダム運用環境調査委員会

## 第3回委員会 議事要旨

開催日時：平成18年12月7日(木)10:00~12:00

開催場所：大阪国際交流センター(大阪市天王寺区上本町8丁目2番6号)

出席者：

- 委員長 田中 哲夫 (兵庫県立大学 助教授)
- 委員 井伊 博行 (和歌山大学 システム工学部 教授)
- 委員 角 哲也 (京都大学 大学院 助教授)
- 委員 竹門 康弘 (京都大学 防災研究所 助教授)
- 委員 矢田 敏晃 (元大阪府立淡水魚試験場 場長)

議事について

1. 第2回委員会で決定した調査計画に基づき、今年度実施した現時点までの調査結果(水質調査、アユ調査、藻類調査、プランクトン調査、魚類分布調査)について中間報告がなされた

2. 調査結果

総括

今年度の調査結果によって、貯水位降下がない状態での吉野川・高見川の状況が把握できた。また、同時に課題等も確認されたので、来年度以降の調査計画を再検討したい。

水質調査について

水温については支川高見川が高い傾向がみられた。

大滝ダムの水質(特に濁り)を検討するには、大迫ダムの影響を分けて考えるため、必要なデータを収集、または必要に応じて観測地点の追加を要望した。

アユ調査について

サンプルとなるアユの個体数が少なく、成長や生息状況を見るためには、十分なデータとならなかったものの、冷水病の発症状況は吉野川本川で約14%(81個体のうち11個体)、高見川で約23%(64個体のうち15個体)であった。

付着藻類調査について

調査範囲の上流から下流で付着藻類の優占種にほとんど違いがみられなかった。餌の質的には上下流で差がない。

付着藻類相からみると渓流域の相ではない。

プランクトン調査について

ダムの湛水(大迫、大滝)によって増殖したと考えられるプランクトンは、概ね下流に向かうにつれ減少していた。

大迫ダムの影響を分けて考えるため、必要なデータを収集、または必要に応じて観測地点の追加を要望した。

魚類分布調査について

魚類の分布状況について今後、過去の資料とあわせて整理を行うこと。

今後の調査に関して

短期的には、暫定運用における貯水位降下時の影響が重要なので、貯水位降下時のデータの収集方法・頻度等は事前に委員に相談し、決定する。

また、アユの調査計画については、再度検討を行いたい。

3. 今後の予定

次回は来年度5月を予定。

それまでに今年度の調査結果の残り、および来年度以降の調査計画には個別に委員への報告、協議を行っていく。